

# IDEAジャパン ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、すべての人々の尊厳の確立を目指して

2012年 2月20日発行 12号



昨年六月二十二日、ハンセン病被害者の名誉回復と追悼のための石碑が、厚労省玄関前に建てられた。除幕式に参加した森元夫妻と國本美代子さん(中央)

## 内に外に、広げよう活動の輪を

理事長 森元美代治

一瞬のうちにすべてを失った東日本大震災と福島原発事故の被害者の皆様にお見舞い申し上げますとともに、復旧・復興しますように念じております。

さて、2004年8月に産声を上げたIDEAジャパンも早や7年が経過しました。暗中模索の中でスタートし、急がず、背伸びせず、牛歩の如く歩んできましたが、現在会員は支援者を含め250名を超え、法人としての形も整ってきました。国内では講演、ハンセン病資料館案内、多磨全生園フィールドワーク、写真展等の広報活動を通じての啓発、国外に向けてはハンセン病の子供たちへの奨学金や生活改善資金をインド、ネパール、フィリピン、タイ、中国の5カ国に実施することができました。ネパールとフィリピンの女子学生は看護師の資格を取るために学んでいます。また本年度よりインドネシア大学の保健衛生学科に合格したIDEAインドネシアの女子学生に奨学金を助成することになりました。これらの資金は、会員の皆様の貴い

会費や支援者の寄付金によるもので、心より感謝しています。

さて、らい予防法廃止から15年、ハンセン病裁判勝訴判決から10年になり、ハンセン病問題に関して無知、無関心だった多くの国民に理解されつつあると思いますが、まだまだ未解決の問題が山積しているのが現状です。13の国立療養所の在園者2400人は大半が家族との縁が絶たれたままであり、死んでも故郷のお墓に入れてもらえません。さらに深刻度を増しているのが、入所者減による医師、看護師、介護師不足の問題です。どこの療養所でも厳しくなる一方の生活環境に不安を感じ、早く死にたい、最後の一人になりたいと思っているお年寄りが多く、最近自死するケースも少なくありません。こうした事態を防ぐために療養所を医療機関として存続、維持発展させるには広く地域社会に開放し、ハンセン病のみならず他の疾病や福祉施設として有効利用させるべく、2009年に「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」(ハンセン病基本法)が施行されました。手始めに多磨全生園

や菊池恵楓園（熊本）には保育所の設置が認可され、その事業主まで決まっているのに、開園に至るまでの作業は進展しているようには見えません。

他方、世界のハンセン病事情は WHO（世界保健機関）の報告によると、2010 年に世界全体で新患者数が 22 万 8 千余となっています。ワースト 3 はインド 12 万 6 千余、ブラジル 3 万 4 千余、インドネシア 1 万 7 千余、他にコンゴ民主共和国、エチオピアなどアフリカ諸国、バングラデシュ、ネパール、ミャンマー、フィリピンなど東南アジアの国々に多くの新患者数が登録されています。「貧困病」ともいわれるハンセン病の新患者は、わが国や欧米諸国には見つかっていませんが、世界的にハンセン病が終息したといえる段階はまだ先のようです。ハンセン病当事者、あるいは患者・快復者を親にもつ子供の就学率は高くありません。IDEA ジャパンの活動の輪は国内外に広げなければなりません。皆様の更なるご支援を賜りたいと思います。

## 鈴木重雄さんと洗心会

山口 和子（理事）

宮城県気仙沼（けせんぬま）市唐桑（からくわ）にある社会福祉法人洗心会は、3 月 11 日の大震災で大きな被害を受けました。地震と最大級の津波、続いて起こった火災に夜通し燃え続ける気仙沼の港と街。テレビ映像を呆然として見続けながら、一昨年 9 月、気仙沼と唐桑を訪ねた日のことを思い出していました。

洗心会の創立 40 周年を記念して、笹川記念保健協力財団の湯浅洋（よう）顧問に、洗心会初代理事長であった鈴木重雄氏にまつわる話を新しい職員たちに語ってほしいという要望がありました。湯浅氏の洗心会訪問に便乗して、かねてから訪ねたいと願っていた唐桑行きを実現させたのでした。湯浅氏は、戦後間もない 1946 年に長島愛生園（岡山県）を訪れ、当時自治会の役員だった鈴木重雄氏（園名、田中文雄）を知りました。1955 年、全国の療養所で初めての高校（岡山県立邑久（おく）高校新良田（にいらた）教室）が愛生園に出来た時、大学進学をめざす若者に英語の特訓をしてほしいという葉書が鈴木氏から届きました。それに応えた湯浅氏は、4～5 ヶ月の間愛生園に住み、教会堂の広間で夜間英語特別指導

をしたのです。森元美代治 IDEA ジャパン理事長は、その時の高校生の一人です。これをきっかけに、湯浅氏と鈴木氏の交流が始まったのです。

鈴木重雄氏は、1912 年生まれ。東京商大（現・一ツ橋大学）在学中にハンセン病を発病し、家族や学友から身を隠し続けた後、1936 年 12 月に長島愛生園に入所します。太平洋戦争下のハンセン病療養所生活、自治会活動、結婚など紆余曲折を乗り越えつつ、愛生園に籍を置きながら、全国的に広く啓発活動が続けるといって極めて異例の人生を歩みまします。1960 年代には FIWC（Friendship International Work Camp）の学生たちの「交流（むすび）の家」建設（奈良近郊）に愛生園の若い入所者たちと共に参加。さらに広範な社会活動の中で培った官民、皇室をも含む幅広い人脈を駆使して、ふるさと宮城県唐桑町（現・気仙沼市唐桑町）の漁業と観光開発に大きな貢献をしました。

特記すべきは 1973 年 4 月、地元の人々に請われて唐桑町の町長選挙に立候補したことです。激戦の末 193 票の僅差で敗れますが、ハンセン病の病歴のある人が公職に立候補すること自体、当時としてはあり得ないことでしたが、鈴木氏の応援に、東京や関西から数多くの文化人や学者や大学生が駆けつけたということは、東北の一町長選挙としては極めて例外的なことでした。応援に駆けつけた人の中には、愛生園や東北新生園の入所者の他に、前述の湯浅洋氏のご尊父で、元・同志社大学総長、国際基督教大学総長の湯浅八郎氏の名前もありました。「交流の家」建設で共に汗を流した関西の学生ワークキャンプのグループ FIWC のメンバーも多数応援に駆けつけています。

選挙から間もなく、地元の漁業界、とくに船主の人々の強い支持をうけて、鈴木氏はふるさと唐桑町に正式に復帰し、人生の最後の挑戦として、故郷の人々の社会福祉のために動き始めました。その集大成ともいべきものが社会福祉法人「洗心会」の設立（1976 年）でした。洗心会は地元の船主の方々の、鈴木氏への強い共感を受けて実現したもので、洗心会の命名は禅の高僧山田無文師で、最初の施設「高松園」（精神薄弱児厚生施設）は言うまでもなく高松宮ご夫妻のお名前をいただいたものでありました。

それから 35 年、洗心会は地域の福祉を担う組織として大きく成長し、今日では 9 か所の事業拠点（知的障がい者入所厚生施設、福祉作業所、生活介護施

設、就労移行ワークショップ、グループホーム、相談支援事業など）をもつ法人に成長しています。しかも法人の理事には、40年前、鈴木氏を支えて選挙を闘い、法人を創設した船主や漁業関係者の子息たち、つまり第2世代の人々が今も続く絆で鈴木氏の遺志をついでいるのです。

3月11日の東日本大震災とそれに続く津波と大規模火災は、洗心会にも大きな被害をもたらしました。本部事務局は2階まで浸水し、就労支援のワークショップは津波と火災で焼失、福祉作業所は全壊、障がい者支援センターも浸水破壊。高台にあった入所施設の高松園は、一部損壊した建物を最近まで避難施設として提供し、地域の復旧拠点となりました。

3月11日、気仙沼・唐桑の惨状を知り、自分たちに何かできることはないか、と思いたった人は少なくありませんでした。前出のFIWCの人々は3月下旬に復興支援のボランティアチームを立ち上げました。その中心には、中国のハンセン病村のワークキャンプに参加して来た早稲田大学の人々がいました。卒業を目前にしていた4年の加藤拓馬君は、内定していた就職先から無期限の休職(?)をもらい、3月から唐桑に「移住」して拠点を作っています。これに呼応した全国のFIWCの新旧メンバーは、今も継続的に現地での活動を続けていることが報告されています。

関西出身の私にとって、気仙沼・唐桑はただ一つ身近に感じる東北の地です。現地に駆けつけてお手伝いすることはできませんが、個人として出来る範囲で、洗心会を支えようと心掛けてきました。その中で今一つ解決したい目の課題があります。それは、鈴木氏の自伝『失われた歲月』上下巻の再版ということです。2005年、皓星社から出版されたこの本は、上下巻それぞれ500ページを超えるボリュームですが、2001年に発見された2000枚に上る自筆原稿をもとにしており、読み始めるとページを閉じることが出来ないほどの力がある書物ですが、現在出版社にも在庫がゼロの状況です。これからも気仙沼・唐桑で活動を続けるボランティアの人々、洗心会で働く人々、人々の絆に新しくつながる人々にとって、なぜ気仙沼・唐桑なのかを考えさせてくれる貴重な資料の一つであり、再版の実現を期待しています。

\*\*\*\*\*

社会福祉法人洗心会 ワークショップひまわり  
取扱商品/菓子パン、パウンドケーキ、クッキー  
TEL&FAX: 0226-24-8255

## 故郷との絆 再び

会員 門屋 和子

3月11日午後、珍しく居間でのんびりとしていたら、急激な大きな揺れに思わずテレビのスイッチに手を！ 私の住む長野県坂城町はほとんど地震も無く、これといった大きな災害も無く、静かな田舎町です。それが、どう〜んという音とともに大きく揺れたのです。画面を見ると、まるで現実では有り得ない悪い夢でも見ているような……。そして幼い頃の悪夢が甦りました。私には、チリ地震が起こした津波の経験があり、通っていた小学校が避難所になって本当に恐ろしい辛い思いをしました。

それが、一瞬にして甦り、とっさに沢山の顔が思い浮かびました。可愛がってくれた先生、仲よしだった友人等々、そして故郷はどうなってしまったのか……。もう何十年と帰っていなかった事への後悔・申し訳なさなどで頭の中が一杯になり、涙が溢れ、帰りたという気持ちが沸々と湧いてきたのです。それからというもの、毎日テレビの前から離れられません。壊滅状態の東北沿岸は瓦礫の山、成す術もなく立ち竦む人達……。そんな中で懐かしい東北訛りの被災者の声に、私にも出来ることは無いかと。

FIWCのメンバーが現地入りして活動していて、ボランティアの募集もしているとの情報が入ったのです。私は、何の躊躇も無く参加希望のメールをしました。出発は池袋で10時に集合し、車に分乗して一路宮城県気仙沼市唐桑町へ。唐桑はまだ危険区域で、一般ボランティアは立ち入り禁止で、芸能人や沢山のボランティアで溢れた賑やかさは全くなく、時折グラッとくる余震と寒さと強風で、被災者の方々も気持ちのやり場がなく、私達を受け入れられるまでには相当の時間がかかったみたいでした。

何故唐桑だったのか？ 其処には「鈴木重雄」さんというハンセン病回復者の存在があったのです。ハンセン病啓発と地域興しに甚大な功績を残し、この世を去った鈴木重雄さん。FIWCは鈴木さんの唐桑を元気にしたい！と、災害発生後すぐさま現地入りを申し入れて、10日後には現地入りを果たし、今現在も続いています。唐桑の方は言います。「鈴木さんは、今でも私達の胸の奥で生きています。鈴木さんだったらこんな時どうするだろうか？ どう考えるだろうか？ と、困難にぶつかった時、鈴木さんのことを思います」と。50年という長い歴史を超えて、連綿として受け継がれてきたFIWCの精神は素晴らしいと改めて実感

したのでした。

復旧支援作業は班毎に分かれての作業でした。関西や関東からの参加者の中には、東北訛りが理解できなく首をかしげる場面もありましたが、私は、懐かしい東北弁を駆使してお年寄りの話をしみじみと聞いていました。船も家も全て流されてしまい、呆然と海を眺めているお年寄りの隣に座って一緒に海を眺めて「これが海なんだよ。でも海を恨む事はない。私達は海に恩恵を受けてきたんだから」という言葉に頷いて。瓦礫の山を見ながら、こんな形であっても故郷へ帰ってこられて、故郷との絆を取り戻せた気がしました。「来年は又絶対に漁をするよ！ 牡蠣の養殖も始めるから食べにきてくれるか？ それを励みにがんばるよ！」と涙でくしゃくしゃになった顔で言ってくれました。また帰ってくるよ、此処は私の故郷だから！



ガレキの処理をするボランティア＝宮城県気仙沼市唐桑（写真上）。  
写真下は避難所で交流する門屋和子さん（正面右）



## 台湾レポート

富田美代子（監事）

2011年7月15日から20日まで、初めて台湾へ行ってきました。19日から20日の1泊2日は、楽生院自教会（入所者自治会）の李添培・元会長宅でお世話になりました。

7月31日からは台湾のお盆にあたります。お盆の1週間前から廟や家々ではあの世のお金を燃やし死者を招く準備が始まります。夕食は元会長の娘さん2人とその家族も一緒に楽しく食事しましたが、娘さんの1人は妊娠4ヵ月になるそうです。日本の

療養所では子供を産むことさえ許されなかった中、元会長は2人の子供と孫まで持ち、大家族となる喜びを抑えきれないようでした。元会長は「台湾でも子供を持つことは大変だったが、さらに大学まで行かせるのは本当に大変だった」と言いました。ハンセン病という病気を負った中での苦労ですから、私には考えもつかないほどだったと思いました。

新病棟は地盤沈下のため、すでに傾き始め、11月に作られた橋には亀裂が入ったので、一度取り壊し、再作業を行っているとのことでした。新病棟は、外部の人たちも自由に使える一般の病院となっていました。建物の奥にハンセン病の病棟があって、入所



李添培・元会長（中央）一家と。左から2人目が富田美代子さん

者は街の人たちと同じ病院を利用しています。元会長は「入所者が使うことを無視した病棟だ。これは許されない。本来は入所者の治療や住まいに使うはずだったのに、個々の人たちへのケアが軽視されている。このことを日本の人たちに必ず伝えて欲しい」と、苛立ちを見せながら熱く語っていました。

日本では社会との共存を望んでいる一方、台湾では一般人が病院へ来ることで、入所者への対応が疎かになっています。重病棟に入院されていた方は「お金があっても介護してくれる人がいない」「介護してくれても毎回人が違って心が休まらない」という現状で、私にとって、とても複雑な気持ちにもなりました。

日本の植民地統治時代に建てられた住まいは老朽化が進んでいます。新病棟は傾き、橋に亀裂が入っていますが、これらが建てられた場所は地盤が緩く、元々建物を建てられる状態の土地ではないためです。政府も解っていながら工事を進めているのであり、一昨年は24名、3年前は21名が工事の音等でノイローゼになり死亡しました。またこれほど多くの死者を出していることを政府は解っていても、工事を止めません。早い時は朝の6時半から、遅い時は夜20時まで、大きな工事の音や穴を掘る音はひっきりなしに響き渡り、私が1日聞いていてもノイローゼになるのでは…というような大きな音でした。

現在旧地区に残っている入所者は約70名で、新病棟に移った方が約150名です。これらの入所者が、いまなお何も出来ない状態で毎日を過ごさなければならぬことがとても腹立たしいというのが、楽生院の現状でした。

納骨堂には、数えられるだけでも約600柱が納められ、その内30人近くが日本人の遺骨ですが、名前が無いので、現在納骨堂の中に名前を書くことを提案しているようでした。

また納骨堂も、旧地区の住人と同じく立ち退きを迫られ、生きている人間にも、死んだ人間にも、居場所を与えない状態にあり、元会長は政府に怒りを抑えきれない状態でした。

歴史的にも負の遺産となっている建物が多い中、どうしても残してほしいと、多くの人が望んでいるにも関わらず、聞き入れようとしない政府は、日本よりもひどい国だと思うのは私だけでしょうか。

病棟で92歳になるおばあさんが私にこう言いました。「両指が無い状態で、もうこれ以上長生きしたくない。何も出来ない状態で生きていても仕方ない」。この言葉は私にとってとても心が痛くなる言葉でした。しかし自分に置き換えてみると、そういう言葉も出るのかもしれませんが。その中で自分ができること、自分が何を感じるかをしっかりと心に刻みたいと思います。

事業の成果 (1) ハンセン病に対する差別・偏見除去のための啓発事業、(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業、(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業、の 3 事業を事業計画として掲げ、取り組んだ。

(1) の啓発事業については、①講演、②写真展の開催、③園内案内と国立ハンセン病資料館における説明、④その他の活動、の四つが主なものであった。

①講演については、森元美代治理事長が 41 回、行なった。②写真展については、八重樫信之理事が撮影した「絆―日本・韓国・台湾のハンセン病」の写真展を国内で 10 回開催した。3 月末から 4 月初め、第 6 回ハンセン病市民学会のプレ企画として現地実行委員会の尽力で、岡山市のデパートで開催され新聞やテレビで紹介された。③フィールドワーク(全生園と国立ハンセン病資料館案内)は、IDEA ジャパンに説明依頼があった団体に対して、森元美代治理事長が 30 回案内し、説明した。④その他の活動としては、第 5 回ハンセン病市民学会家族分科会のシンポジウムの記録を、日・英・韓・中の 4 カ国語別のブックレット『絆―ハンセン病家族の国際連帯』として出版した。

(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業については、①生活改善のための支援(交流及び支援)、②奨学金支給、の二つが主なものであった。①IDEA 中国、IDEA インド、IDEA フィリピン(クリオン島)へ生活改善資金を提供した。また 5 月に岡山市と高松市で開催された第 6 回ハンセン病市民学会に理事長、理事、会員多数が参加した。森元理事長は、教育部会の分科会「新良田教室の残したもの」にパネリストとして参加した。8 月に森元理事長夫妻がインドネシアのハンセン病コロニーを訪問した。クリオン島に子供服を送付した。

② IDEA 中国、IDEA インド、IDEA フィリピン(クリオン島)、IDEA ネパールの学生に奨学金を支給した。

(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業については、①IDEA ジャパンのニュースレター(ハンセン病市民学会特別号、9 号、10 号)の発行、ホームページによる情報発信 ②資料提供がある。

① ニュースレター 9 号では、森元理事長の母校・新良田教室(長島愛生園にあった療養所唯一の高校)の存在意義、郷里の喜界町立第 2 中学校の後輩たちとの交流について触れ、新良田教室で受けた教育、故郷で応援してくれる後輩たちの存在が、理事長の人生でいかに大切であるかを書いた。毎年、11 月 3 日に開催される全生園祭の IDEA バザーに、10 年間続けて協力してくれている同志社女子高校の平松譲二先生の寄稿文「隣人愛を求めて」を掲載した。同校では、聖書の授業を通してハンセン病問題を学び、全生園で出会う人びとの「痛み」を感じることで、お互いに共生できる社会を願う教育を実践している。村上事務局長は、ブックレット『絆―ハンセン病家族の国際連帯』出版までの紆余曲折について経過報告した。その結果、会員から約 100 部の購入申込があった。

ニュースレター 10 号は、韓国で開催された「国際フォーラム in ソウル」の特集号として発行した。分科会「尊厳の確立」で森元理事長「われわれの人生を踏みつけないでください」と蘭由岐子会員「日本におけるハンセン病差別の今日的様相」、分科会「マスメディアの責任」で村上絢子事務局長「一緒に歩いて行きましょう」と八重樫信之理事「つながって生きる」が、それぞれ英語で報告したプレゼンテーションの要約を紹介した。国際フォーラムに初参加し、各国の IDEA 会員と交流した九重能利子会員の感想を掲載した。ソウル宣言、韓国ツアーの写真ルポ、昨年 12 月に逝去された、IDEA ジャパン推薦人の大谷藤郎先生の追悼文を掲載した。

ホームページについては、適宜更新するとともに、自動翻訳機によって英語でも読めるようになったので、各国の IDEA メンバーにも情報を発信している。

②資料提供では、ブックレット『絆』の英語版、韓国語版、中国語版を世界の IDEA 会員に送付した。

平成 22 年度 特定非営利活動にかかる事業 会計収支報告書

平成 22 年 4 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日まで

I 収入の部		(単位：円)
1	会費入会金収入	
	入会金収入	7人 7,000
	会費収入	288,000
2	事業収入	0
3	補助金等収入	
	地方公共団体補助金収入	0
	民間助成金収入	0
4	寄付金収入	
	寄付金収入	2,752,045
5	その他収入	
	基本金金利収入	240
	その他	
当期収入合計 (A)		3,047,285
II 支出の部		
1	事業費	
(1)	国内のハンセン病に対する差別・偏見除去のための啓発事業	1,463,092
(2)	国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業	893,672
(3)	ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業	280,649
事業費支出合計		2,637,413
2	管理費	
	役員報酬	0
	給料手当	240,000
	什器備品費	0
	光熱費	0
	消耗品費	50,578
	会議費	57,429
	通信運搬費	78,195
	印刷製本費	8,746
	租税公費	0
	雑費	9,365
管理費支出合計		444,313
3	予備費	27,507 + 51,823 = 79,330
当期支出合計 (B)		3,161,056
当期収支差額 (A) - (B)		△ 113,771
前期繰越収支差額 (C)		3,205,161
次期繰越収支差額 (A) - (B) + (C)		△ 113,771 + 3,205,161 = 3,091,390



2011年12月2日、横浜駅東口地下そごう時計広場前のイベント広場で開かれた人権メッセージ展に、あおぼの会（東日本退所者の会）がはじめて参加し、IDEA ジャパンのパネル、手作りの年表、資料などを展示しました。（写真左）また、10月1日～10日まで国立ハンセン病資料館の1階ロビーで、写真展「輝いて生きる」が開催されました。資料館の見学に来た看護学校の学生さんや、ウォーキングで立ち寄った人たちが、熱心に見ていました。（写真右）

### \* トピックス \*

\* 会員の寺島萬里子さん（医師・写真家、85歳）の写真集が出版されました。

『一寺島萬里子写真報告—韓国・台湾のハンセン病』

出版社／皓星社 TEL 03-5306-2088

FAX 03-5306-4125

定価（本体 1800 円＋税）

\* IDEA ジャパンの理解者であり、ご支援いただいた故荒井英子さん（恵泉女学園大学准教授）の遺稿集が出版されました。

『弱さを絆に、ハンセン病に学び、がんを生きて』

荒井英子著・荒井献編

出版社／教文館 TEL 03-3561-5549

FAX 03-5250-5107

定価（本体 1800 円＋税）

老眼鏡ありがとごめりました



フィリピンのクリオン島に住むお年寄りのために、老眼鏡の寄付を呼び掛けたところ、こんなに沢山届きました。子供服と一緒に送ります。皆様のご厚意に感謝！！

発行責任者：森元 美代治  
特定非営利活動法人 IDEA ジャパン

<http://www.idea-jp.org/>

事務局：

〒204-0012 東京都清瀬市中清戸 4-847

中清戸 4 丁目アパート 7-605

Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記：村上絢子

間もなく東日本大震災3・11と福島原発事故の1周年になります。日本の行く末と個人としての生き方を問われた1年でもありました。そのなかでIDEA ジャパン会員がどのように活動してきたか、その、ごくごく一端をお知らせします。諸般の事情で、ニュースレターの発行が大幅に遅れたことをお詫びいたします。

E-mail [info@idea-jp.org](mailto:info@idea-jp.org)

FAX 04-2925-8165